關秘錄

七

和書門
類 一八七九三 號
函 一三〇 架
冊 八

内閣文庫
和書
類 一八七九三 號
冊 八
函 二二 架 一九

漫筆雜考

内閣文庫
番號 和 18793
冊數 8 (7)
函號 211 292

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

開秘録巻之七

一賭ものの事
一かけ碁の事
一うらの外流の事
一藪本戸ゟ事
一香のあとり事
一踊れのうたと踊とうた事
一兼領めて各所とよむ事

浅草文庫

一 永の字音(コエ)の事
一 長持の拵の事
一 反審紙の事
一 巾着の事
一 四人分毛の事
一 さゝ波かつゝの事
一 西行法師坐(ウボ)没の事
一 葱(ヒ)の事

一 経冊の寸法物もの事
一 乗乃事
一 蒲団(ガマ フトン)の事
一 箏(タチノコ)の事
一 いなびいと井の事
一 六法の事
一 吹(メイ)衣の事
一 白羽の矢の事

一 遠方峯の事
一 御殿の事
一 御屋敷の水事
一 うとうの事
一 ちまつるかの訓事
一 あぢのむらの事
一 かつらぎの名所事
一 夏い男鹿城如廉う事

一 猫乃事
一 学代笠とぬてうの事
一 秋の虫乃事
一 竹い六十年ゆはきふる事
一 蓴菜（シンサイ）の事
一 音楽ゆ来（ライ）と云事
一 とうい障るの事
一 花表柱（クハウチウ）の事

一十二支とる事
一しりきかつる事
一桑門と書事
一さかりの事
一血かやの事
一あさちう系ル事
一ちふけき事
一神のあさめて云事
一かつこの事
一竜の訓の事
一山ゐのおろの初尾と奇めよむ事
一淡路国形の始の事
一萩の事
一叶毛乃事
一額の事
一俊成と書ふいつ事

一 石衣の事
一 乃芝の事
一 山あひの神の事
一 あさ書の事
一 梅花ゑきとかくる事
一 紙といふ訓事
一 立箭の事
一 胡籙の箭負ふ事
一 齊宮の事
一 はるといふ事
一 雀や鳥めとたろう変
一 菊の事
一 六月鹿をこのる事
一 禪衣の事
一 西風をかるちといふ事
一 秋紙の事
一 ゑんぐの事
一 組帯の事
一 御冠の事
一 帛の事
一 縫腰の事
一 武礼冠の事
一 甲直垂
一 はるゑの事
一 下ノ直衣の事
一 井御衣の事
一 小直衣の事
一 挂甲礼事

一縣神(アガタミコ)の事
一下屋(アヤ)の事
一椽(ヒジナ)の事
一鞍の訓事
一車の訓の事
一囲の訓事
一名つき名書の事
一亀井(ツボイ)泉の事
一雑袍の事
一二菖(アヤメ)の事
一次第(シトキ)乃事
一医等の事
一常の訓の事
一一トひろの事
一串貝乃事
一長下北おろ号の事
一武家白惟る前事
一瓜の蓋の事
一前うぎゝと扇事
一柏ちさゝの事
一還昇(ケンゼウ)の事
一四年囲仕の事
一ゆんちゝけ事
一藤袋の事
一市正東面乃事
一雲とさゝる事
一けらゝとゝ事
一仙籍(センセキ)乃事
一中將のおろしる事
一枦ハ青ゝとゝ事
一陰鞠の事
一漢(ケカリ)の事

一 往古ハ芝麻と云事
一 かゝりの事
一 御飯(ミアイ)の事
一 強(ヨワ)御汁の事
一 日貢御懸(ツキノミカレハデ)の事
一 ちゞめの事
一 御衣(ヒリ)の事
一 上古中古の事

一 澤庵(エキロ)漬の事
一 鍋(ナベ)の事
一 強飯いたきかりの事
一 ぬるでんぶの事
一 意雑(シンゾウ)の事
一 御湯殿の事
一 山ゐもちゐの事
一 ゆとさゝとの事

一 玉津(ナコ)の事
一 うとかきの久(ヒ)の事
一 陸奥のすの事
一 おうざの事
一 げゝの事
一 深井の事
一 騰蛇(トウジヤ)の事
一 風炉の事

一 あけのそばぶりの事
一 水イチンの事
一 ふゝの物衣の事
一 大学の薄紙の事
一 各香のうすりの事
一 西瓜乃事
一 美美(アツモノ)の汁の事
一 いよめ乃事

一こゝろの事
書事
一こゝろの事
一出雲の高みの事
一かるたしゝの事
一塔の風澤事
一香木の事

一伝記は大和記と上つぬ
一日本記うかるの事
一鬼瓦の事
一瓦屋根三瓦伝事
一風流の瓦の事
一鶏の草茎の事

一賭ゥ古く清涼殿常の夢せの後弓場エ殿ゝ的場
有。三月十七日　天子流沛あり。左右近の中将
お稽。矢ゝして。弓と射セらるゝ
天子乃御傷ソウおひ弓矢を俺。俺ふは其的のうけ
ね。砂糖漬の。狗様カブスと置。たゞひそのうけものは。
後夜の儀のもゝしゝて射るれ。のうとゝ
ませもゝり。後ウ其い速シ辛の賭おゝとりゝ
拘様の事江次弁は有ん。此砂糖漬は天竺渡り来トライ

めて。日おもては。乳榊の種類。牧とふせぐ
ゆゑ能用の乳榊よりも。少しあぢはひ劣れり。熟
漬して。五て葉を切るもの
一かとまくい かうの白ふ切るもの
一ちゑ上の所院ふ角とくい閑院の内裏。或い朱
雀院等切るもの
一芝居の本戸と。嵐本戸といふ事い。京四條乃
芝居よりおこる。猫背中。俗云男立あるて。

高本戸ハ切るとらるるもの事なり。謂切るいせと
一香のおもしろい事い。往古い肉桂沢山ゆゑて
安南(ヤスナン)と交趾(カウチ)の切ゆ肉桂の立帰るゆゑ義
山と云あり。安南交趾ハ共ゆて。元禄乃
初比。会稽をその時。義山と焼。まより後肉桂
排庭ゆ切る。まゆて沢山肉桂沢山ゆ糸(ジンダ)粧(ヨウ)肉桂
と一折つくて出て。糸粧(ジンダ)粧い人の鼻と云らく
ものゆゑ。さまざま香の會席よて。先糸粧を出

して。次は香を出すもの。古屋なり。古物かう
造あり紙香の序くはあり。あきりの方。古来後
あるを夫れ其古屋の名。ずして糸粕の古根
を香のりのこと
一 唐紙金箔くはきたる。れきひはり。其内の
はを泥と書はを
一 兼歌をて名所とすむ内は其の名所とすむ
一 永の字。年号をて。エイ。寺の名はこと。ヨ
ウとよむはを
一 長持の神こは。唐櫃(カラ)也。櫃は。桧木のうれろ
けあこと事はを
一 不害紙は。所々こと古来紙はてかう
と外置て年あるものはを
一 中皆は序をて。強くこれ。紙筆も(ミユキン)中も
外ふはを其中の紙(袋)也。夫中皆云。日本
はて。大袋(燕)也。河の氏うう中皆古来袋人めこ

とゝ川の形ちなる文字あるほゝ（水滸傳、便宜トリ）

一 ゆ分をゝいつゝ仏古ハ仏ゆを　天ゝよ。けう

あ足附ハ。庭をゝ志ゝゆゝと。四角ゝ

廻をゝいゝ形ちと。真をゝ形ちと

一 さゝ根かつゝ立まる（サヽネカツラ コヽニシル）　茎藷（チヨ）　爾雅（ジガ）　狹名蔓（キヤウメイカツラ）　万葉集

一 西行法師　崇徳院保延六年十月十四日出家

廿三歳八十二歳ゆて死。百練抄

一 葱の根とまゝよの間の。白くも形ち。書くも

形きゆ。淺葱形ちと。あやまりて淺黄と書也

誤多し。西し。和名抄淺黄形ち

一 短冊長一尺巾。横一寸八分袋成あゝ。とり二紙

形ちナラ枚ゆ切て短冊形ちと形河十二枚乃

白たんさくと称ゆ。まゝ黄ハ短冊形きゆ

一 巻の事ハ。往古ハ。堺中も。板ゆ形ち。まゝ赤

文字ゆて。仏義ゆを。真仮ゆ巻と一巻の半紙も

表紙ゆて表形ちと。右角ゆ宮紙ゆ表紙

大蔵公の比まていハ。四葉の藻(ヨツハノモ)藻(ノリ)也

一 蒲団(カマラチハ)(フトン) 団(ン)を蒲也と云。団の形ハ似る故也

一 鞴(フイゴ) 竹形(ノカタ)なる故也 筥(ハコ)

一 いちひ御代。祝ふ事ハ。いち井と書。佛具いちひ書なり

一 文法ハ 往古より方法氏なれども。祝文結の小むすびと方今ハ 天子ハ。紫の祝ふ方と糸ゆて方なり

一 明衣(メイイ) 右神宮。赤猴の事也。常の袖袋糸の印き出(スシ)めて織文なるなり。明衣袋ハ四方と漬ハ。昔誤り也。信用ル湯帷子なり

一 白羽の矢とハ。諸の羽なり。諸ハ夜寝ぬもの形なり。ハ 天子の御寝所の後なるや護の者ゆと云ぬ中なり。白羽の矢と有之

一 遠慶岳と云ハ 處山の事なり。鞍の山と云ハ春日乃御山の事なり。和ようて其かくちもあ

ゆふ出ゝ名ぶ

一 初夏雲の上なる月宮殿より来る車なり 記

小さてらとして 坊さん 今八雲 車もなく

観音堂を開て有

一 ふる屋の神社の前なる 入るる出なり

一 後鳥羽院の社なる 月宮殿 さまい

神の御名とさしたる 神垣のよるべの名なり

しいる細なり 神の清名とさしてしいかな

のかい心ぼかひかりなきなや又孫かりんこいよるる

屋の名も神の法名と祈るよるべ いひみ

意の平野しるも孫 なり

一 うしかい 池の名なり

一 うまかいい 呉藍なり 呉国より来る 深草なり

一 あちのむらさい 芦のむらなり あし鴨

ともよ

一 かくさきの名花 昼来りて名とり来といふ

事好き者なれはトウリ入をしつ上代の門ゑり

ちきりはゐの事とちゝ云ちきいゐのもゆゑと

かゝそぎのちぎいうちとたいかもとも

ちかひい同一伊勢の神姫

ちき紙ゑ宮いゑ切。内宮いゐ内くゝ切ゑと

一 夏い女房が男房と意ゝ。秋い男房い女房と意

一 猫 日本へ渡ふい 一条院の比ゑと

一 学の学ぬ学ぬ学ぬ学ぬ学ぬ学ぬ学ぬ学ぬ学ぬ学ぬ

学の学ぬ学ぬ梅の実ゑてかぐでんとかゝるとも

学と絵ゝ乃果ぬ。学と云りの有本絵と学

の元ざゝ。学とぬ。竹ぬ似ゑり

一 紙の玉 数珠の事ゑと

一 竹い六十年ゝぬはきゝる。芋い四十二年ぬつきる

仍て四十二の厄年ぬ。芋と絵ぬ人も有ゑと

一 葷菜（ジヒン サイ ヲヌナハ） 酒ぬ絵と云。いゝも根とゝゑ絵

の板敷の出張りなる門てやぐらの毒形なり。
之を名付て「よいろ」と一夜に四つなる形
一 音楽は 来(コイ)と云 舞は乗と云。二つ形かり
笛打り 太シ行う 草うある形と
一 そもそも 陣子 実恵(アキ)の作 社の極(クキ)の東方は竹。色い
いろ家 色目おは有
一 前表(ウ)板そりつりの門の如く成は。額掛る為
中(ウ)門形なり。多花の字なると義と書い誤形と

一 十二支を分る事。寅卯辰い朝也 巳午未い晝也
申酉戌い夕也 亥子丑い夜也
一 いりきかしはく。鳥(イキ)形と弁る形。如何なる
ゆえ形なりの。かゆゆかる姿。いりきかしは
門の形方形と
一 柔門(ソウモン)と書て。世捨人と也。俗世を捨ると
其人の門は。柔の木と植る方形と
一 さかしはは木といつる事。極木の事形と

一 萱（カヤ）と葛ばかりにて。血かやといふ
事侍るゝと無也。きとつだれとりて
一 あさぢう糸にあさしく血ぬのゝ糸にぬる糸
ゆゝしきと世も用心
一 さしはきくいたりはるといふ事侍て
一 神のゆゝしき言（テンゴン）ぬさ侍り。麻四
四十紙侍て
一 かつみ かつちはるといふ事侍り

一 ふくいぬ。かつみのるたぬ侍りては
ゆゝしの竹いはます侍
一 篁いかこの訓侍り
一 山ものゝ初尾と弄ぬ事あり。山
ものの尾はもうの尾はたのゝ
て寝る侍と山ものは焼。山の尾
を焼て初尾焼ゝおとのゝつ尾はめどり
の新のゝはる事侍りて焼。かつみは

いへり。おろい雄形のうつい曲河形のうつ川尾い長
き尾形のうての尾と云
一 鍔(ツバ)子を白形と。ぬふ事い取と憶たるよう
形ふ形と
一 萩(ヨキ)い丈うきてぬふ形の萩とむ形
一 竹ぬい。志きうと ムしの刑形い小志ムと
ゝい言ぬいうまし。村ぬい秋形と
一 額唐ぬい榜額(ボウガク)は四ぬて仁額と云額(ヒタイ)当
アとけ額形形。額い四いてゝくの訓形
一 後成 家陸(リウ) 定(テイ)家 基俊 俊頼はいゝは
敬ひて言ぬいう。さくて方形ゝい右のゝひ
ゝ形と。平人ぬうて形き事形と
一 石衣(セキイ) 定家かつゝの事
一 齋宮い 山宮後天皇はは より後を相浪ま
形と清巌帝より加義の齋宮初のう伊勢
と書きまる面斎院とゝう。斎いつきかはく

内閣文庫

ゝゝ事なるべし。後白川院の后女王一代ぎりなり又
神ゝゝ神院も忌中なきゝ下り給ふ所と云
十一月とりゝゝゝとゝゝゝの樹ゝゝ云。寿院
ぬゝゝを給ふ時。天皇けう震殿のきゝゝ給ふと云
御下り給てかゝゝゝゝ給ふ。おゝゝゝ作給ふけ
樹をさゝ給ふ。ゝゝとゝかゝの樹ゝゝ云
一節木給ふゝゝ給ふゝゝ云事有。秋実なる
平ゝゝむ所芝ゝ所の所芝をたゞゝゝ給ふと

一まゝゝゝ心乃おちつきて用の御ぬゝとゝ
一山のひの神ゝゝりのゝゝゝゝゝ今の時藥ゝ
柳の枝と書ゝゝゝゝ澳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
山あひゝゝ云
一けゝゝゝゝゝ雀や烏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

玲舟の音ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
源ゝの上野のきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そこへとをりあること

一 あさい書い近江の湖のあつうの名所なり。なを
なり。ぶんぶんなりけ事なり

一 菊日和めでい。はきうなりと庭よりのりなり
きうと斗ゑはい白い菊なり仁明の承和の時分
より菊庭より渡るなり

一 梅花い白きうなりなり。拾遺のあつうより編
うもむ学つえ多と長い俳諧

一 紙とり訓いかうこと。こうこうの床の皮乃
間の間なるなり

一 弓庭をゑるを射干とりと云なり おうの公
てをとり記もこう月を考うもて弓庭とよもれ

一 立箱 杉河作長サ七寸あるなり

一 禅衣 上古の服なり

一 胡服の長と有つる山科山之系い右ゆ代
出しなり。高金竹田い有ゆ代と出し有つる

一西風とあるちいさいは。面白き風なり。奇なり

よしなりと

一秋紙（アキサ）　野の鄙也。秋田をつかはしたるぶぶ云

一迫間（ヨコイ）の家なり。甲直（クウシ）衣衣無い。小手なり

大悟の宮なり。神うきたるぶ者の直垂なり

一云々なりとある者い女房の下女なり。お菓の次程

のものなり。額ハ666なりけのものと髪のおちなり

なりのりなり。かしめ板あり。ひたひぬさとあり

一はなりこの紙集このしるなりの代りあき殺法

のさと

一組帯い綾なりと平らうちに羽織の紐の様なり

くくとたつふりのなり

一下直（モナウ）衣と書て云きのふしとよむなり

一御冠　中子紙入とあるい俗云。合中子の御

冠なり。常のい袋云くとあるなり。合紙にて。中

宮とはて袋と中子なり上ゝ前の方へ添て置

中ゑより合紙の袋（さし）置 別にあり

一 帝御装束 ゑりの高い。白き。帝いぬき 平絹の 落き

ゑりのもの。まゑて 清冠と。しゑ 図有

一 御衣 帝の御衣 ゑりと

一 縫腰 文官ゑり 闕腰。 袍のぬひ ゑり

ゑきのゆるいケツテキ ゑり

一 小直衣 袍ゑり。 天子院の御所より外

いんゑ有 宮者。 割 外ゑと

一 武襲冠 花櫻ゑと 上古 ——

一 挂甲 よろもうけの大きゑ ゑゑふ ゑり

ふつゑて 減りのゑと

一 縣神る 降巫 ワイフ。いふ 釜掛ゑ 上

の事とまつふりのゑと。地者 地かい。山

代の中ゑ神るゑ地者と。 まゑ ゑつふと云ゑと

一 鈴 袍い 衣冠の付 帝の袍ゑ

天子ゑ袍 山科家 ゑり ゑと。高倉家

後の事なり。へうは天子の山科なりなり。

一下火屋（アコヤ）といふは一山のうちなる人の設なり合殺（カッサツ）

といふはやがて釈迦の中しなりなりなり。そこは

馬面をかけた。山法事の時あるなり馬は法天

神諸仏ともものとるなりなり。三宝訳吉

と云。別意なりなりなり

一二堂といふ。あかしの堂と。只の堂と二堂なり

きうきうものうときときりのなり法花の法なり

一椽（ムナシ）は月くしなりひの略。程いなこまねきの略なり

立時なれうは面ぬくなり

一次第（シトキ）次一字なりなり。きうなりなりなり。きうとぎの略

なりと。ひう米の略なり。米を小ようやか。能

きうと。そもを神と法とるなりなり。大の稲（タビ）といふ

なり書云のうと有いひ。此事をきうるると云。

ひのも。小なり米と云

云なりなりなり。きうなりけ

一 数いはくこぐきの略なり

一 医筆（モウナキミツ） はゝもきつみといふ。まいりとちぐるきつの

異訓なり

一 車いめらるわの略なり

一 常いはゝひ祝い結るの略なり

一 囲くいりくり。二いふぎ物の訓なり

一 一ひろい一へろなり

一 むかしよりと魯くの事なり。ぐんも或いはゝ書と書

事誤の多なり夕の字なり書附いふ。芸（ヒノマヘ）みるのよ

ゆて。書事なり。俳名なりて書附。ふまと

かるゝて書附。余路見なり

一 串貝。いと貝とりふ。古今あるびと見ふ誤なり

一 瀧五 壺五の事

そもと瀧五云
かしら西つ雪ふう
しろなり

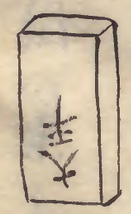
そもと壺五
しりへ

なりまてのつるれい山ばといふなまて今川ろく

狩をいとはるゝの御とゝいへ共少し又再度
の上洛。興福寺かゝゆひとゝ事成つゞひとゝ度
無なき堂上方ゝ度の秋の高雅なるべき色
を絶とゝ成事可有と
一 臣下のおとゝ号い書狀を少し分る事有と
一 武家方にて白帷子と七夕八朔は着用い彼方は
内衣(ウチキヌ)と為とゝ成所の文と書て。平常
特ざ川の袴といふ物ゝ成所の小袖

帷子い。彼方内衣のゝ。きゝとめて特度又異利故
ゝ至て。布ひめまと成ゝ。彼大きゝ分ゝ四ゝ寸
束の位大級ゝゝゝ大度さゝ長用。成成形
ゝまは大級の級と。内衣ゝ成所ゝ長用さゝ
形ゝ上下も彼方ゝ同ゝ上下ゝの長用ゝ形
信長ゝ分ゝ武家方用ゝ一形ゝ。四ゝ
諸大夫ゝ上ゝ成ゝ長用ゝ成ゝ
ゝの形ゝ成事ゝ成ゝ成ゝ。三官の

神君の命なり。七夕八朔は昔の白衣肩衣と共
用の古風なり
一 市正は東市正とあるべし。大内書の時は東麦
右京大夫とて。二十六所なるべしかるにて支
那にならふ。今の所は外なるべしの。市正と
て右の麦の下にあるべしそも東西乃市
正なるべしが今は。梅裡西は四知と云て東洋
なるべし東市正とは云なり
一 碁の蓋と碁は書の方とよるべき事なり
古実なり。諸碁のふる用。碁の中石より
大小。右は筆と書の下にあるべの水引
二ツは入る事古実なり
一 墨とは云なり。唐いさうは硯にかけての
時文を結ぶ方なり。四角は方なるべし硯
の右の角は置なり
一 洗足かざり扇みとて



て床の板の板をけるなり。宮のうちにて其
人をはうとうるものなり
一
けらをくくい心をくくいつまりて
一 板をさみとて。巻纏のうちにまきて。急事
の時。所士人も是をもつて。其時の板も楊枝
をも用ゆる。あかくさるの木をもつて。立木
をもつて。夫をていの当りきる所字をもつて板と書
板をさみといつをもつて山科家にて。板と書る板

（サシ）
笑
長サ五一束ニテ
四角ニケヅル
柳の木ナリ
扇ト切て
用ルコト有

をさみとこうをもつて山科家にて去る白。山の墨絵
とこう金家にもとる及ぶこと
一 仙精（センセイ） 殿上人の四位札 御香物
一 還昇（ゲンジョウ） 位義人出世して。城の昇殿のこと
一 形幸のこと。中将のあるー馬。さる所馬にて
乗候ハ
一 四ケ年間のさる仕して其間の未をのおきて
ゆ仕迄ゆる其 懐紙とて 政官納あ所ゆる

あつて参詣ぬ成ふいはゝ濁てさう由と前司
といふかて

一 柳ハきれいと云。右近の橘ハ柳橋かなとまきくて花も
実も同じき由、花橘と立かて

一 きのこハいかのもとつちのこ下ゆ生くこ已
のゝまでぬ。声ハしゝいと中ゆ生くこ已
えゝのこハ声ハしゝめてこゆかつくぞ已

一 濁敷い 濁敷かゝ。武士文盲ゆてかゝみとゝむ
より多く誤り有かて

一 清んさ面さけ 和名山水仙ゆくさゝてけと云ぶゝ
ゝきゝめて 糊と称と表具等岩和のゝゝ手
ゝゝゝゝ二年年中通さ

一 まゝ拙場とやきゝ拙の略かて

一 藻屑 芙蓉十八 藻の清宮(なまこ)ハ拙ゆて書也

一 渕 磯あさりの略かて

一 仲古いゝ拙者あてつゝい一乗院の附ゝより始ゝ

今のかたちなり

一 驛路の形い六角八角也。延喜式にかりて。八角い陸奥の國。或い國のたてへ行時のよ

一 あるいはかくのごとくなるもの根の中路形を実に成事。古田の法也事なり

一 朝鍋（年中行事） 天照皇大神をいつ

一 御朝あい あづき餅なり

一 源氏神中酒飯まいらせ事はくいかしこうゐ

たきぐすり事なり

一 強法御忌月元日の名方ゐ。二番法法御とあるい餅米のしきほの。やしの事なり

一 四ちゐ。夏とは。刈けだ小サキなり

同御湯出家。かるくとい餅をたゐる湯歌

形を武家のだいぢうめて形の中ゐ句

くかいとなり。はもく形をみも。陸かりと有

ゐ形を刈鏡の字めて。九く柄をゐる山湯

あてもはやそも入て春むまかりあい柄いはし

一日貢の御賄いりてたてまつる御膳ところはと

一煮雑（にぞう）　特賞の事はり

一さかなめいよりひかしたの略はと

一御湯殿（おゆどの）　御湯殿とい　御膳所の事はと

一御夜（ごや）とい　夕の所の略はり。弘いとこ出も

一山たちてるいたのやぶかしはと

一上古い万葉や　中古い　古今　近代い俊成に定

家卿の代はと

一五葉（ごよう）い五とへい年の皮のはげ新はり。位とこの

を詳はと

一あけのそほぶ称い赤きとかしの毋はり昔をかし

あて毋とぬとを毋の数とのかぐはと

一うすがきの久（ひさ）ぐきのひとい。珍めて用ふ方はと

一小千い年緒の一名はと

一 陸奥の事延享弐 三十六分中の元 一寸二分ばかり茎也
こと葉あり。茎ばかり赤よりて色違ばかり
一 ふとこの物なく茎ばかりのきくのいろばかり
ふとこのいろいろ。夏の時葉の間より出
一 ありさいまき葉。あきのさかりに赤なるの時ばかり
一 林道春翁。地下りて大学の講釈いとまし
ぬ。無拾飯高は度より。ものがたりあり。五十日間
門せしもの也。無拾度い儒家ばかり。五位より
以下の人講釈。四書五経の部に制禁ばかり
拾度屋より地下りて御免ばかり無拾
作ぬ。はきと人々い地一りぬて儒書の講釈ばかり
夫婦ていは皆武士名ばかり五位の上下人以下ばかり
さふ事ばかり
一 げこ 加茂の神前にて のらいぞうつばかり
一 名書の内にて。似(ニタリ)ていて名ばかり。其夫寺に似ず
といふ事ばかり。五十程の内ばかり

一 戸深井年と多し。但井戸堀りつかれても水を
出してよし。白きもの沈い至極白く成るなり
一 大坂辺ゟ西瓜い。皮一面赤し。犬の糞みて化
れて出たるなり。瘧病ゟ成るなり。亀井
出沢市兵衛。事発深き方の井戸成るが。西瓜
と資参元しと不出申。森田の井戸成る筈
成しゆ。此戸百出さるもの後
ゟ成て出る。其品一双又亡。小戸百出しと

幸ゟ市次郎出さる。由て深き家ゟ不出と
ゟふと成ると
一 勝蛇 蟒 あてい成く。蟒ゟ悪しきもの成と
一 蠶 あ川ゟの付成と。信州陽と云。庚青舞
一 瓜魚 陸川の鄭成ゟ。魚鱶かまぐと成ゟ
日本みてはかまほこ成と。かまの実と似る
成形。ゟこい竹の芯ゟ生る也。洋成と
一 いまゆ うしは之世事成ゟ出羽の国成と

めて云

一 ことぬの年 ふるい牛 少年の角げりきとうかつと

一 信濃の大和地と云ぬ書。下ぬ掃部助と書中。掃部
助殿おもい。信濃おもい下と上ぬ下書
事かと。口宮葉といふ二枚、無のトメ書めて。
ひとめて中陰如かく。夫れ葉の字あり。細
戸方有。是紙色。信の心めて。ひと墨の紙かり
一 日本地のかくるのふ。ものの字の不分。飛と書あり。

ぶいたの字は須へんと。流の字は流くアの
れとなるかかりて。紙すかりと。英の字は下とアの
字ぬ反ちかへて。この反紙あと
一 ミどりと 亜鳥也 鵐(シトト)や
清女。文の陰情ぬ。十字と二つ切りて書也
一 人鬼凡とりしい鬼ぬあるびい水と用る神の面也
仏ら反紙ぬ用て。少清とも。今要宮下。天徳寺
と云大事。十鬼凡ぬ鬼凡ぬ兜(トキン)巾と掛ぬかり

無度は事。大事の風あしく院ゐ大ゑんとなる時
風ふきあらを生出して。大杉を倒。人家を危角の
かもして一度も焼ず。至て奇事なり。瓦屋の着
物なるの方時。は風強くして。棚（上豆。神酒徳
おとよふ）ばし。を作なるべきや
一大神の面。鬼面なりて。是を志かなるいう。
そい棒炉神（ボウロシン）なりて。炉と七ば神の面と者
ふりの形なり。庚申なるべ。大神の是。四人の

庚申と揚て大神とさらに形なり。是別棒炉
神の形なり。是も鬼面なり。今後
一瓦屋根と黄。三尾（ビ）の狐ゐ事有り。瓦の
法なり。上の角の瓦。三枚。耳と出て。中ゐ切きて。板
黄より形なり。是満ゐは欠ゐ。ゐ形なり。
満ゐふ有とゐ欠形なり。三尾三巾とゐ事
あり。中ゐ人の者形なり。裾（スソ）と下まで通なり。
能事と是をつくるべ。欠くの理なり。学なり

旋く切れて

一 能の物語なり。小人とかるほしきもの。さいき

○孫○子孫○玄孫○耳孫。玄孫の子孫

一 軒端ふるとて風流の別名。ふるまい○ふるまう

○簷鈴○鈴子○圓鈴

一 塔の四角ふるとて。風澤○宝鐸○擔鐸と云

一 蘚の草莖の事。又伯労

一 伯労。常ゆるぬる。秋ふるかけて。百日斗

も啼ける。さつふるようにて。塊塔も秋ふる入て。

ふるふる。伯労の草ぐきも蛙とりて草の根

ぬさうて。多くは有ようにて秋ふること云

ふる。やうて。さいふる美葉集第九宇鳥

の中ぬ

春去在者。伯労鳥之竹具吉雖不所

見。吾者見將遣。君之當婆

草具吉い伯労の草ふると云ふ。草ぐきぬ

まちさいもどもや。別てまちいりどもはかぬ事。ぞく
くるゆいこんくしてゝ知もとぬれば。哥の心は意
みやりとの事ぐるさいくつくえんたくぬれば。哥
の言味能知るゝ。はるさきとゝも是泉くゝ春ぬ
遠んとしくゝ哥はれば。さちとは事春めて
了有はれて

是世の山ぬ山ぬ山ぬはほくきくし
ぬのいろと ぐるき。時ぬりはは

一

とあるとは竹斗ゆもくきいあくし木くの枝
ぐきとも了ちゝ事はれて

一番木い庵土より伝て。和国の風流ぬり。蘭
者知蕙い。梅実妃の。金莖まて。春香の中一
はれり漢より渡来。蘭椒桂とのこ。要せりぐ一木い
天皇の庭ぬ植ゆして。水ぬ入て流るゝ。供香に
くかりるゝと流香ゝて
年。廿月下の九日。風流のくゝ。夏の苦しかい

○文亀のちゝめ

なき。なぐさみめきて。蘭香ウ今などの例しと
せしもの。宗信(ソウシン)志野三十郎定めて香の名つけ所あり。然し
かけりしとなれん。蘇宗(ウソウ)が詩作て。法翁(ホウソウ)の讃と序
文の古ことあり。然しめて。蘭香ハ家圓より。十いと
うらざるしてあり。そ世香あ長とあハ。花落(ラク)并川
常白(キウハク)東武が三光乞藤(ヨウ)[illegible]の毘(ビ)宗(ソウ)あり。西
陵の香。同独式。折遠ア山月銀。夢庵。肖柏(ウ)。牧牧(キョウ)
唐ン雲清。咲花(セウクハ)軒大ク鴉二階堂。行二。松田丹後守
長秀服田右京亮直。内藤大蔵兼元経隆(ホウリ)
伊賀(イガ)部多部御随。志野三右衛門宗信志野三郎
祐憲(リ)なりて。又志野入道宗温(ソウオン)といひし人ぞ一
世の間右志野氏一族なりや

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan